

原田真人監督、メキシコで映画製作の予定

グアナファト国際映画祭に、特別来賓国として日本が参加

東京，2016年7月29日

グアナファト国際映画祭 2016（GIFF）において、墨日映画フォーラムが開催され、山田在メキシコ日本国大使、アルマーダ駐日メキシコ大使、安藤国際交流基金理事長、サンチェスメキシコ映画庁長官が出席しました。同フォーラムに参加した原田監督は、両国の交流史に輝く珠玉のエピソードをモチーフとした映画製作の構想を固めつつあると発表した。両国民間の友情を語る逸話は多数存在するが、その中で最も美しく、メキシコでも日本でもまだあまり知られていないエピソードがある。それは、およそ 100 年前のメキシコでの出来事であり、堀口九萬一という日本人外交官と同国在住の日本人たちが、決死の覚悟で、マデーロ大統領一族の命を救った感動的な物語である。



グアナファトでの記者発表会に臨む原田監督

堀口九萬一（1865－1945 年）は職業外交官として、1910 年から 1913 年の 3 年間、メキシコで勤務し、臨時代理公使の職務を担った。1913 年 2 月の「デセナ・トラヒカ（悲劇の十日間 [訳注：ビクトリアーノ・ウエルタを首謀者とする反革命勢力が軍事クーデターを起こし、マデーロ大統領の監禁と暗殺に至る悲惨な数日間]）」に際して、マデーロ大統領の一族が在メキシコ日本国公使館に庇護を求めた。堀口公使は、ウエルタ将軍一派による公使館攻撃の危険が迫る中で、一族の保護を続けた勇氣ある男であった。詩人である息子の堀口大学は、当時、メキシコに滞在していた（詳細は、以下のリンクをご参照ください：<http://bit.ly/2a8Aa6z>）

約 1 世紀後の 2015 年 4 月、メキシコ合衆国連邦議会上院は、日本の政府と国民、そして九萬一氏の一族に対して、彼らが示した深遠なるヒューマンイズムに満ちた勇敢な行為を顕彰する記念プレートの除幕式を開催した。その 3 ヶ月後、メキシコの上院議長が日本に公式訪問をおこない、東京で開催された除幕式（訳注：上記記念プレートのレプリカ）では、九萬一氏のご子孫に対して、議長が直接感謝の意を表明し、同氏の模範たる気高き行為を称えたのである。

原田氏は、現代の日本映画界を代表する名監督としての評価が高く、40 年に及ぶキャリアの中で 20 本以上の映画を製作。その作風は極めて多様で、社会派映画やホラー、ドラマから歴史ものまで幅広く手掛けている。主な作品には、「Kamikaze Taxi（1995 年）」、「バウンス Ko GALS（1997 年）」、「金融腐蝕列島 [呪縛]（1999 年）」、「クライマーズ・ハイ（2008 年）」、「わが母の記（2012 年）」、「駆け込み女と駆け出し男（2015 年）」、「日本のいちばん長い日」などがある。



原田眞人
